

---

# 佐久間象山の思想と国防論

笠 井 和 広

---

## 一. はじめに

佐久間象山は文化8年（1811）2月28日、信濃国松代城下に生まれた。父はト伝流の剣術の達人で一学といい、象山はその家督を18歳で相続し、学業優秀で23歳のとき江戸へ遊学をしている。この期は天保年間とよばれている時期で、日本の封建制度が揺らぐときであり、日本の近代化への転換期ともいえる。それは幕末、西洋諸国やロシアなどが日本に開港を迫るにあたり、ヨーロッパ資本主義の荒波が押し寄せてきたときで、とりわけ日本だけではなく極東においても同様である。そのころ象山の君主の真田幸貫は海防掛老中となり、象山は君主より海外事情の研究を命じられたのである。これにより象山は海外へ目を向け蘭学に関心を高めることとなり、この期の日本の激動を感じた先駆者の一人である。

蘭学を学ぶ以前の象山は朱子学が唯一の「正学」と信じており、陽明学者佐藤一斎に入門しているのであるが、一斎の講義には出席しなかったのは有名である。このように朱子学を「正学」と信じる象山が、西洋諸国の接近とともに西洋事情について関心を高め、蘭学と対外関係にも強い関心をよせ古い思想から新しい思想を唱え、視野を世界に向けて拡大することを強調し、西洋の学術を導入して国力の増強を主張している。さらに重要なことは、朱子学の側にたちながら自ら西洋学術を学びとり理解し得ていることである。

そして、そのころの洋学の中心である蘭学を幕末の武士階級に浸透させたことは象山の力が大きかったのである。事実、幕末や維新に活躍した人に勝海舟や吉田松陰らがいるが、このような人々には象山の弟子が多く、象山はその時代の武士階級に思想的、学問的影響を大きく与えたのである。<sup>1)</sup>

この象山の朱子学のとらえかたは特異で、朱子学を駆って西洋学術の自然科学におもむかせたところに特徴があり、西洋学術を学ぶことは朱子学と相容れざるものではないとしているのである。そして、幕末の国際状況や対外関係を察しながら、幕末日本の国内海防の重要性を唱え、西洋学術を受容し象山独自の砲術を確立していくのである。

## 二. 朱子学の理解

象山が自己の課題としたのは、いかにして対外的危機を克服するかという問題であった。象山がこの対外的危機と本格的な取り組みをみせるのはアヘン戦争による清の敗北以後である。それまでの象山は西洋の政治に関心への理解を示しているのであるが、西洋とは国体・政体を異にする日本が西洋の真似をする必要はないとしている。そして、象山は日本の封建制度と中国の封建制度を同一視していることにより儒学に深い関心を示し、なかでも「正学」と信じる朱子学を再興することが実践的関心の主要な内容となっていたのである。<sup>2)</sup>

元来、朱子学は中国で思想的に体系化され、自然・社会・人間が同一の「理」によって貫かれており、それら三者を道德性の優位のもとに連続的にとらえようとする合理主義の体系である。それは大きく分けて、第一に存在論にいう「理気」説、第二に倫理学、あるいは人間学にいう「性即理」の説、第三に方法論にいう「居敬・究理」の説、第四には古典注釈学および著述、第五に科挙に対する意見や社倉法、勸農文に分けられている。<sup>3)</sup> この朱子学は、「格物窮理」という客観的で知的な学問研究と道德の涵養という主観的方法である「存心持敬」を併用することによって「天地万物」の根本的な原

理である「理」を体得すれば、誰でもが道德の完成者である聖人になれることができるとするのである。<sup>4)</sup>

その朱子学者である象山の学問態度は「学を為す要は格物窮理に在り。(中略) 今の人、試みこれと物理を言へば輒ち曰く、我、方に人倫日用を窮むるこれ暇あらず、而るに何ぞ物を窮むるに暇あらんやと。嗟、豈に人倫日用にして物理に外なるものあらんや。余未物理に味して人倫日用に者を見ざるなり。」(邵康節先生文集序<sup>5)</sup>)と主知的・概念的で、物理の法則性を追及するという意味における「格物窮理」が学問の基本として重視され、「格物窮理」が道德的実践の前提条件としているのである。それに象山によれば、朱子学は「凡天下のものに即て基論を窮めて智識の量る尽くすと申す。」(川路聖謨宛)とし、朱子と同じく「天地万物の理」を窮めることを目的としている。一方、王陽明は陽明学について自己の心中に固有する良知を発揮することを目的として、<sup>6)</sup>象山は「夫にては外馳せる之弊有之候間、吾心は即ち理にて、天下之万物尽く我に備わり候えば、吾心の理をだに窮め候えば、夫にて事済と甲候事に成候。」(川路聖謨宛)といっている。すなわち象山は「格物窮理」の対象が陽明学の「在我の万物」ではなく、朱子学にいう「天地万物の理」であるとしている。さらに象山の「理」は朱子学における五常の「仁義礼智信」を内容とする実体的な道德規範ではなく、自然科学的な実験によって検証されものや経験的現実から帰納される個別の経験法則に近いものと理解される。道德性と物理性、規範性と法則性が連続している朱子学の「理」を象山は後者の物理性・法則性に焦点をおき、「格物窮理」が「仁義礼智信」という道德性の究明ではなく客観的な事物の法則的認識のための方法概念であったのである。<sup>7)</sup> このように象山の「窮理」の対象は主として自然科学に向けられ、「理」の普遍性に対する確信によって「宇宙に実利は二つなし。この理のあるところは天地もこれに異なることは能はず、鬼神もこれに異なることは能はず、百世の聖人もこれに異なることは能はず」(小林炳文に贈る)と象山自身の世界像の拡大とともに、その「理」の内容を豊

かにしている。このことから「五世界に涉り、そのあらゆる学芸・物理を窮める」（時政に関する幕府宛上書稿）ことが「朱子学の本意」であり、西洋学術を兼ねて学ばなければならなかったしたのである。よって世界中の学術・物理を窮めることが近世日本社会の正統思想である朱子学によって正統化され、伝統思想によって正当な位置を賦与されることとなったのである。むしろ西洋学術を学ぶことは「朱子学の本意」に沿うことなのである。そして、兵学についても「談兵も講学家の一端にて、本より儒術中のことに御座候。逆も入りて相となり、出て将となるの規模無之候にては、正学も畢竟無用に属し申候。」（加藤氷谷宛）と、象山は時務と論じ、兵法を講じることも「正学」と矛盾しないことを明らかにしたのである。

この結果、象山は学問の広大さが宇宙間の心理を説くものとし、中国と西洋を区別なく、わが国に取り入れることを主張し、西洋学術も朱子学と矛盾するものでない結論に達しているのである。

### 三. 蘭学から砲術への関心

象山が蘭学研究にの起点となったのはアヘン戦争による清の敗北であった。それは単に清がイギリスに対して軍事力が劣っていただけではなく、「西洋学術を精研し、国力を強盛にし、頻を得候て、周公・孔子の国までも是が学に打掠められ候事、抑何の故と被思召候や。畢竟彼の学ぶところは其要を得、其学ぶ所は其要を得ず、高遠空疎の談に溺れ、訓話、考証の末に流れ候て、其間一、二有用の学に志し候ものありといえども、一対万物の窮理其实を失ひ候。」（ハルマ出版に関する藩主宛上書）と西洋学術が清を上回っていたことに原因をあげているのである。わが国においても同様に「兵法に申所の彼を私利己を知るの義を勉め度事に奉存候。」（ハルマ出版に関する藩主宛上書）と、西洋の知力・学力により国内の充実を図らなければならないとしているのである。

象山の西洋学術に対する関心と評価は、単に国防に直接役立つ成果の面だ

けではなく基礎や方法の面まで向けられていたのである。こうした態度の根底となっていたのは、道徳性よりも物理性に力点をおいてとらえ「格物窮理」の観念を媒介として、近代西洋の自然科学を理解し摂取しようとしたのである。<sup>8)</sup>

このような思想をもつ象山は、はじめ江川太郎左衛門より砲術を学ぶのであるが、本格的に砲術を研究するようになったのは、蘭学者、坪井信道より原書のオランダ砲術書を贈られたときからである。その砲術書は従来の砲術伝書とは比較にならないほど進歩したものであったことにより、原書によって蘭学を研究することの必要性を痛感するのである。それからオランダの百科全書「ショメール」を参照し、ガラスの製造・養豚の実験・ブドウ酒の醸造・薬用人参・馬鈴薯の栽培などを試み、「いずれも皆異国の書に出總て実験の慥なる手口にて候、たとえば箇様に致し候へば、水精の如き美事のビードロに出来候、箇様に致し候へば、葡萄酒出来候。箇様に致し候へば養豚に破れなし杯申事、一々密に手に取る如く有之候。」(塚田源吾に贈る)とオランダの原書のとうりに実験して成功しているのである。これらの製品は日本では出来ないものであったが、蘭学者の原書を用いれば造られるものであったのである。しかもビードロにおいては、「大店のビードロ屋へ遣わし此様の品はしき由申させて候所いずれも此は渡りにこの表の品にては無之と申候。」(藤田甚右衛門に贈る)と舶来品と同様で、その出来栄えの見事さをいっている。これらの実験の成果より「西洋人とても三面六臂もこれなく矢張り同じ人にて、本邦人なりとて片端者にはかれなく候へば、よく其書を読み考をとき候はば、必ず同じ様に出来候うはんと存じ取り掛けり候所、果たして何の苦も候はず出来申候。」(藤田甚右衛門に贈る)と自信をもち西洋学術の理解は飛躍的に高まり、象山は次第に西洋学術への確信と傾倒を深め、洋式兵法・砲術の研究に最も熱心に従事し、「ケチール」の兵書・「カルテン」の砲術書を読み西洋砲術書の読解に沈溺した時期であった。そこで今まで日本に伝えられている砲術に不合理を見出だし、「原書を読み發明仕へば、江川殿

心得られ候位の義は、僅か高島某の伝へ候のみの略々の法にて、西洋軍争地に掛り候の百分の一にも足り不申候。」(山路源太夫に贈る)と誤りが多いことを指摘している。このように日本および西洋學術の長所、短所を理解するために一人でも多くの日本人に原書をもって蘭学を学ぶことを広く望んだのである。しかし、蘭学の原書を読むことは容易ではなく、そのためにオランダ語辞書の刊行を計画し嘉永2年(1849)に「ハルマ出版に関する藩主宛上書」を藩主に上書している。

この弘化・嘉永期の軍事に関する蘭書を購入する主体は幕府であり、翻訳は天文方で行っていた。それは封建制矛盾の克服のため実学で儒学に奉仕する学問として育成され、蘭学の批判的精神の警戒心から蘭書そのものが市中に横行することを規制していたのである。<sup>9)</sup> しかし、象山は西洋諸国の侵略には、すべてのものが平等に全力で対処すべき問題とし、西洋諸国を知るためにも少数支配者が蘭学の独占をすべきではないとし、一般の人々へ普及させることに努力したのである。さらに重要なことは、象山の原書による西洋學術の深い理解とその実用性の確信は、単に旧来の砲術ないし砲術家の批判にとどまらず、わが国の学問全体のあり方や社会情勢への対処まで進んだことである。<sup>10)</sup>

それからの象山は自分の砲術を「西洋真伝」と称し塾を開き、嘉永3年(1850)に木村軍太郎・武田斐三郎・津田真道・勝海舟・坂本龍馬、翌年には小林虎三郎・吉田松陰らが入門している。多いときは100人を越える門弟がいて、奥平・大野藩などの藩そのものが入門しているのである。<sup>11)</sup> それは、ここにおける象山の砲術教授についての留意点が、その砲術が原書から直接得られたもので高島や江川の翻訳からの知識と異なり正確であったというだけではなく、象山が西洋學術の内面的理解者であったからなのである。

## 四. 砲術

象山は以前から西洋自然科学の素晴らしさを感じ、世界的視野をもっていたことを示すものとして、「世界の形成、コロンビウスが窮理の力を以て新世界を見出しコペルニキウスが地動の説を発明し、ネウトンが重力引力の実理を究知し、三大発明以来、万般の學術皆其根底を得、聊かも虚誕の節なく、悉皆著実に相成、是に由て欧羅巴、弥利堅諸州次第に面目を改め、蒸気船、マグネチセ、テレガフ等創製し候て、実に造化の工を奪ひ候義にて、可愕可怖模様に相成り甲候。」（染川星巖宛）と賛嘆しているところがある。象山のこのような見識は、日本が世界情勢の中におかれた立場をふまえて、アヘン戦争における清の敗北から実用性として西洋砲術の優秀性を観点において世界的視野にたち、西洋自然科学のすばらしさを認識したことからもあったのである。その象山が最初に江川太郎左衛門に入門し砲術を学ぶのであるが、実用性の観点から西洋砲術と日本砲術を比較し西洋砲術の優秀性を指摘し、原書により研究を続けたのは前述の通りである。この原書研究の結果、嘉永元年（1848）には、オランダ人ヘウセルの原書により、3斤野戦砲（カノン<sup>12)</sup>）1門・12<sup>ドイツ</sup>拇手（ホーキツスル<sup>13)</sup>）2門・13拇手<sup>14)</sup>（モルチール<sup>15)</sup>）3門を造り試演まで行っているのである。このときの大砲の出来栄は、嘉永2年（1849）5月28日の中俣一平への書簡にしめされている試演時の命中率のよさや、嘉永3年（1850）の大砲鑄造場所の視察のとき、ほとんどの大砲が西洋において使用されていない旧式のものを使用していることを指摘していることから、旧来のものより素晴らしい出来栄を察することができるのである。これらの大砲の区別であるが、西洋では、

一. フェルドゲシュキュット（行軍野戦の銃）

二. ヘレーゲリングゲシュット（城堡を取り囲む銃）

三. フェスチングゲシュット（城堡の銃）。（竹村金吾に贈る）

の3通りとしているが、象山は、二のヘーゲリングゲシュットと三のフェスチングゲシュットが使用する場所において名称が変わるものとしており、二

と三を同じものとみなし2通りとしている。このそれぞれの大砲であるが、一のフェルドゲシュキュットは「口径十六ドイムのホーイッスル、短き十二ポンドのカノン、口径九ドイム五十二、短き三ポンドのカノン、口径七ドイム」、二のヘレーゲリングゲシュットと三のフェスチングゲシュキュットは「二十四ポンドのカノン、口径十五ドイム十七、十八ポンドのカノン、口径十三ドイム、短き十二ポンドのカノン、同じく六ポンドのカノン、五十ポンドのモルチール」（竹村金吾に贈る）が二と三が含まれるとしている。これらの大砲の特徴は一が行軍野戦で使用するため手軽で便利なものである。二と三については一より大きいが大砲というよりも少し小さめのものである。それは象山がベウセルの説を引用し、小さめの大砲が有利であることを説いているからである。このように大砲といえ小さめに製造されており、象山は大銃という言葉を使用している。

砲台についても区別をし、

- 一．ヘルドアホイト（行軍銃架）
- 二．ヘレーゲリングアホイト（城堡を取り囲む銃架）
- 三．フェスチングアホイト（守城銃架）
- 四．キュストアホイト（海浜の銃架）
- 五．シキップアホイト（船で使う銃架）．（竹村金吾に贈る）

の5通りとしている。これらの大砲と砲台は、そのままの使用法で使用するのではなく、象山は「ヘスチングの為に備ふる銃器にても其土地の廣狭山川の形成に随て、二十ポンドのカノン口径十五ドイム十七、十八ポンドの、口径十三ドイム七十四を、備ふる事も有之、又十二ポンドのカノン以下を多く備えて即十八ポンド以上を用ひさる」（竹村金吾に贈る）もあるとして、使用する場所の形成や実践経験によって大砲の種類をかえて使用するとしているのである。

大砲の使用方法については洋書「ターフル」をみれば容易に理解できるとしている。しかし、日本の砲術は洋書で研究することによって容易に理解で

きる事でも象山は、「江川にてはけしからず、伝書など惜しみ候て中々三年五年にては皆伝など致し候はぬ様子にて中々私など大きなれうけんも御座候。」（母に上る）と日本では皆伝を与えず、秘伝と称してなかなか教授しない日本の秘密主義を批判している。この秘伝については日本の特徴で、武芸に関する奥義は修行態度、年数、知識、人物等を兼ね備えた弟子のみ伝授する秘密主義をとっているからである。長年戦乱がなかった平和な日本にあって武芸に関する究極の目的は人間形成であり、技術そのものの習得もさることながら精神修行を重んじているからといえるのである。象山も西洋にない日本精神文化の素晴らしさは、「東洋の道德・西洋の技術」と唱えていることから認識しており、前述のごとく象山独自の朱子学思想によって「西洋の技術」に素晴らしさも同時に学ぶべきだとしているのである。<sup>16)</sup>

嘉永6年（1853）には西洋砲術に関する原書研究により、わが国銃砲史上特質すべき「砲学図編<sup>17)</sup>」を著している。この図編は大砲における弾丸、信管、装薬などを図解している。特に弾丸では大砲の種類により形が変わり、外側の材質が鉄製であったり、柔らかいもので造られた弾丸や弾丸の形を変形させたものを使用することなどを解いている。このように同じ大砲でも違った弾丸を使用し、攻める場所、戦術によっても弾丸を替るものと認識する。使用法についても小銃と大砲に分けることを著わしている。小銃については向き方、歩き方、玉の込め方、打ち方、戦法、進み方にまでおよんでいる。大砲においては前述の3種類の大砲の使い方や使用する場所にまでにいたるまでしめされており、象山のすべてにおいて進歩があったのである。

この期よりの象山の時流を抜いた砲術、学問、見識は門弟の増える結果となり、藩によっては象山の大砲・砲台まで取り付けるまでになるのである。さらに、これらの門弟や藩は象山の影響を受けて近代国家の形成を推進していくのである。

## 五. 海防論

天保期の国際情勢は西洋諸国がアジアへ資本を求め市場を獲得していく時代である。特にイギリスはインド会社を設立し、インドアヘンの販路を確保し、中国市場開拓の足場をつくるためのアヘン戦争は、イギリスの極東進出政策のひとつの具体的なものである。このアヘン戦争において、清がイギリスに破れるということは当時の支配者層や象山にとって大きな衝撃であった。このアヘン戦争の情報により「無二年打払令」が撤回され、「薪水給与令」が出され幕府の政策が転換している。特に朱子の思想をもつ象山は、儒学の母国である清が破れたことに対し「時に清国、英吉利との戦争の様子は、近頃御伝候や。慥に承候とも甲かね候事に候へども、近來の風聞にては、実に容易成らぬことに被存候。事勢抛り候ては、唐虞以来礼楽之区、欧羅把洲の腥穢に變じ申されまじきとも申難様子に聞こえ、忝々嘆はしき義に有之候。(中略)何れにも界には本邦の患とも可相成事と被存候。よしや、彼より我を犯し候心なく候とも、法にも『その来らざるをまず、其持あるものをたのむ』とも申し候らえば、国本を固くし、海岸防禦の事備具候様、本邦に生を受候うものは、願わしき事に有之候。」(加藤氷谷宛)とアヘン戦争に対する動静を示し、対外危機に関して国家存立の基礎として海岸の防備を備えるようにいっているのである。

また、このアヘン戦争での清の敗因は「すべて本邦之火術は、皆時世に至り候て開け、彼方之火術は、尽く乱世に機功を尽くして組み立て候うもの故との相去る事数等の優劣を免がれず。」(加藤氷谷宛)と工夫をこらした優れた砲術の実用性が決定づけたことを指摘しているのである。そこで象山は「海防に関する八策」を天保13年11月に藩主に上書している。

- 一. 諸国海岸要害のところに嚴重に砲台を築き平常大砲を備え置き緩急の用に応ずべき事。
- 二. 和蘭貿易の銅を暫く差し止め右の銅にて西洋性に倣ひ数百千門の大砲を鑄立、諸分配有之度候事。

三．西洋之制の倣ひ堅固の大船を作り、江戸御廻米に難破船無之様仕度候事。

四．海運御取締りの義、御人選を以て被口仰付、異国人と通称は勿論、海上方端之奸猾巖敷御糾有御座候事。

五．洋制に倣ひ戦艦を造り、専ら水軍の駆引きを習わせ申度事。

六．辺鄙の浦々里々に至り候迄、学校を興し教科を盛に仕、愚夫愚婦迄も、忠孝節儀を弁へ候様仕度候事。

七．御賞罰弥明以御威思益々顕れ民心逾固結仕度候事。

八．貢士之法起し候度候事。(海防に関する藩主宛上書)

この「海防に関する八策」は、主に西洋に習って大船や戦艦を造ることや海軍編成を中心とする防衛力強化に主眼が置かれている。この上書は象山の對外思想をみるうえで重要であり、象山の思想からも「海防に関する八策」が上書されたと考えられるのである。その上書の理由として「まして此の説のイギリスに於いては、その猖獗兇悍、虐を隔海の諸国に逞しく仕候事、此度唐山と戦争に及び公候にても、相分候事に候へば、能々彼我の勢を審にし、格別に遠大の御心備無御座候ては、叶はせられ間敷御義と奉存候。」(海防に関する藩主宛上書)とアヘン戦争の勃発に対して強い関心を示しているところからである。また、オランダ人が長崎に入港するたびにオランダ風説書として報告している海外事情より「イギリス人の此度唐山と戦争方付次第、本邦に交易を願ひ、万一交易御免無之節は、千年漂流人戻しの為海岸荷乗り寄せ候船へ、理不尽に鉄砲を被打掛候。(中略)唐山の騒乱方月次第、長崎、薩摩、江戸三ヶ所へ兵艦差し向け候様。」(海防に関する藩主宛上書)と資本市場を日本に求め、これを拒否したときは、モリソン号事件のことで、日本の主要都市に戦艦を派遣するイギリス人の野心を指摘している。そして、象山は「抑彼国は唯利にのみ走り候習俗に有之候へば、仮令本邦に深き讎怨有之とも、本邦を乱防仕為のみに熊々兵艦をしらひ、(中略)其儘兵を構え本邦を悩まし、遂に要して交易を始め、本邦の利を網し候べき科見に可有之候。

元来道德仁義を弁しぬ夷狄の事にて、唯りのみかいしこく候へば、一旦兵乱を構候方、終始己の利潤に相成り可甲と見込候はゞ、聊か我に怨みなくとも、如可様の暴虐をも可仕候へば、此方にては其怨のなき所を待みには出来かね候義奉存候。」（海防に関する藩主宛上書）と利益のみを考え、脅しをかけ強要して交易を始め、日本を植民地化しようとするイギリスの対日政策をみているのである。

このようなイギリスに対し象山は「容易に交易を御免座候うと申し候ては、春秋伝に所謂城下之同様にて公儀之御恥辱此上あらずべからず。」（海防に関する藩主宛上書）と対処すべきであるとし、容易なイギリスとの平和開国交易は屈辱としているのである。そして、象山はイギリスとの貿易の利益に対し「イギリスとの交易相開け候はば天下有用の品を以て益々外国無用の品と取換候次第にて、天下の御大計に有御座真敷奉存候。」（海防に関する藩主宛上書）と貿易の経済的利益は否定され、国の富が少なくなると鎖国体を公定するようであるが、一方で当時のわが国と西洋諸国の軍備、兵力を比較してみても単なる鎖国攘夷論は成立しないことは明瞭であり、「一概に御拒否御座候はば、必争乱に及ぶべき候。争乱に及び候連までも、我に勝算だに多く候へば、深く懼れ候には足らず候らへども、当形勢を以思量仕候に、此儘にては私の勝算至るれ乏しく候様奉し存候間、この筋如何様にも被尽口御国力候て、御武備を嚴重に被建。」（海防に関する藩主宛上書）と日本がイギリス相手に戦っても勝算はなく、多大な損害がでるとし、まず武器、防備を充実しなければならないとしているのである。そのイギリスに対する具体策は先の「海防に関する八策」を重要視し、さらに「御急務と申すは西洋に従い数多く之火器を御造立て候と、同じく戦艦を御仕立、水を習わせ候。」（海防に関する藩主宛上書）と大砲、戦艦を造ることを急務としているのである。

当時、幕府は大船建造を禁じており大船を造ることができなかった。又、技術的にも容易ではなかった。だが、象山は、このような情勢を天下の安否と考え規定を破ることは、「如何にもすまされまじき御義理に可有御座候へ

ども、天下のためならば天下のために改めさせら彼に、何の御憚御座候。」  
(海防に関する藩主宛上書) と天下のためらなば天下のために立てた法を改めることは許されることとしているのである。いつの時代にも法は守るべきものであるが、非常の際には非常の法を用いて、時代遅れの法は改め天下のため西洋製戦艦の造艦や防備強化を行い、イギリスの侵略に備えなければならぬとするところに象山の卓見がある。そして、象山の具体策として「海防の要は砲と艦にありて、砲は最も首に居れり。」(省けん録) と砲艦を重視し、「阿蘭陀より水軍の法に鍛練仕候もの測量に長じ大艦を扱い候もの等二十人、船大工十人、大小の鉄砲を造り候職人、并に陸戦の陳法習い候者各五人宛も被口升呼候て、御旗本衆御家人の内水軍十隊」(海防に関する藩主宛上書) と兵学熟練者や大船、鉄砲職人をオランダより雇い入れ、旗本、御家人による軍隊の編成をすることを指摘している。このように象山が水軍にこだわる理由は、イギリス所領の喜望峰におけるイギリス軍備の充実の例をあげ、他国船は喜望峰を通過するのに許可を必要とし、許可がない場合イギリスはその船に対して攻撃を加えることをあげている。日本においてもこの喜望峰の例を模範とし、海岸に近寄る異国船は砲撃を加え、たやすく上陸させないために「天下七ヶ所大湊に(石ノ巻・江戸・鳥羽・大坂・下の関・長崎・新潟) 御船役所を被建」(海防に関する藩主宛上書) と国内要所の防備を充実させることをあげている。大砲については、「ホーキツスル(筒の目方百二十貫目余) 千門、モルチウル(筒の目方五十貫目余) 千門を被鑄立申候。(中略) 又大小の石被数十間を被造立甲候。」(海防に関する藩主宛上書) と、近年中に西洋製を模倣し製造すべきとしているのである。ここにあげた陸上防備・砲兵や人材登用に関するものまでが「海防に関する藩主宛上書」に述べられ、これは「海防に関する八策」になかったことである。それから十年後には蛮社の獄で投獄され、そこで書かれた「省けん録」の海防の内容は大艦や要所防備を増やし充実させ、陸戦においてまで論じ、それまでよりさらに一歩進んで書かれているのである。

このように象山の海防論は、西洋諸国と交易通商による経済的利益が目的ではなく、西洋諸国の有益な学問、軍事、人材を取り入れ、国の防備を充実させ西洋諸国と対等なる地位を確保することであった。国内外の情勢を察して無謀なる開戦を避け造船、戦艦購入、有能なオランダ人招聘などの具体的方策を掲げ、国防の完備を唱えたところに象山独自の国防論があるといえるのである。

## 六. むすび

これまでの象山の思想をみると、朱子学者である象山が自分自身の思想から西洋学術と朱子学は矛盾することではないとし、世に存在する有益な学問を学ぶことこそ朱子学の本意と考える西洋学者であり、砲術家でもあった。そして、その象山が西洋自然科学に全面的に傾倒するのはアヘン戦争を契機として、西洋学術が東洋のものより優れていると認識したからであり、西洋のものだから取り入れようとしたわけではない。

自然科学の面では西洋がはるかに東洋を圧倒していることは認めつつも、西洋人が東洋人より優れているとは考えてはいない。それは象山の有名な「東洋の道德・西洋の芸術」の言葉でいい表わされているといつてよい。又、いつの時代においても西洋は過去、未来においてまでも東洋に勝るものではないとするものである。それは象山が西洋学術を導入しようとすることで知力や学力の面で西洋を圧倒し、さらに進んで日本が政治面、軍事面でも西洋諸国を圧倒できるようにするのが目的であったのである。象山は西洋学術導入反対者や西洋学術のうわべだけ理解している人々の態度では西洋には追いつけないと考えたうえで、原書により直接自分自身で西洋のよさを学びとり、基礎から出発している点はまさに日本的であるというべきである。

さらに象山の砲術教授における留意点は、西洋事情と西洋学術の普及拡大を自己の責務とし、それを西洋砲術という当時の最大の需要に応えるかたちで深化と拡大をはかったことにある。この西洋学術についての科学的認識

は、多くの門弟たちを通じて深く社会化されていったのである。その意味では象山は単なる西洋砲術家ではない。幕末の変革期において朱子学者として国家的危機を感じ、国防問題や国家的課題に取り組み、日本の近代化にまで努力したことは、当時の学者にはなかった姿である。象山の思想、学問は近代国家形成に活躍した幕末の志士たちへ大きな影響を与え、現代の我々に対して日本とは、又、近代化とは何かということを再考させられることを痛感するのである。

## 注

- (1) 大平喜間多「佐久間象山」吉川弘文館 P 121～124 1959
- (2) 前掲書(1) P 45～48
- (3) 井上哲次郎・蟹江義丸共編「日本倫理臺編」P 1～6 1970
- (4) 麓保孝「宋元明清近世儒学変遷私論」国書刊行会 P 12～14  
1970
- (5) 信濃教育委員会「象山全集」全5巻1935～1937 以下引用資料はすべて「象山全集」から引用した。
- (6) 岡田武彦「王陽明と明末の儒学」明德出版社 P 46～48  
1943
- (7) 金子鷹之助「佐久間象山の人と思想」今日の問題社 P 86～90  
1943
- (8) 本郷隆盛「近代日本の思想」有斐閣 P 114～116  
1979
- (9) 沼田次郎「洋学」吉川弘文館 P 153～160  
1989
- (10) 前掲書(7) P 73～96
- (11) 前掲書(1) P 85～90
- (12) カノン砲。長大な砲身の射角四十五度以下の低弾道遠距離射撃砲。

- (13) ホーキツスル。曲射砲。物陰や水平にある目標を打つために湾曲した弾道で上方から弾丸を落下させる射撃砲。象山は人砲と訳す。
- (14) ドイム。三分二厘八毛九弗二四八。
- (15) モルチール。臼砲。砲身の短い大砲で射角が大きく弾道が弓なりに曲がる。象山は天砲といっている。
- (16) 前掲書（8）P 96～98
- (17) 砲学図編。「象山全集」第2巻にそのすべてが書かれている。